

20

乳幼児専用スペースに入って遊ぶ小中学生がいます。



「ここには入っちゃだめだよ」といっても、「なんでいけないんだよ」といって、全く動こうとしません。どこで遊んでもいい、自由に遊んでもいいと小中学生は思っています。それは間違いではないのですが…。

(児童館職員)



いえもんのヒント

児童館など放課後の子どもたちの室内遊び場では、「乳幼児専用スペース」などと名付けた未就学児の遊び場を確保しているところがあります。小学生以上の立ち入りを禁止しているところがほとんどだと思いますが、そんな場所で小中学生が入って遊ぶこともしばしばあると思います。

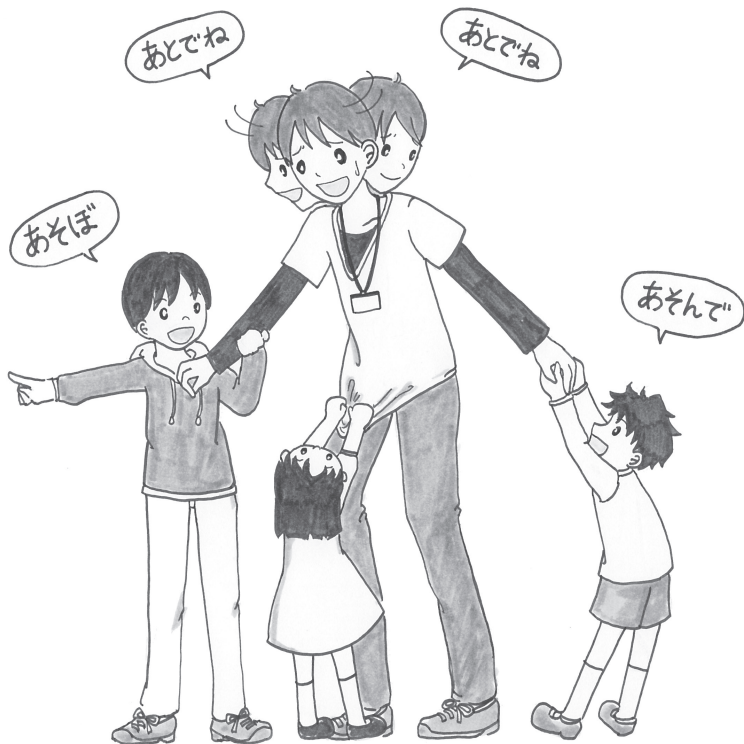
乳幼児専用スペースで遊ぶ小中学生の姿を目の前にした時に、まずは「なぜ彼らはここで遊びたいのか」を考えてみましょう。そして本人に聞いてみましょう。もしかしたら「ただ入ってみたかったから」という単純な理由かもしれませんが、「用があって入っていたら遊びになっちゃった」といった反応が返ってくるかもしれません。どんな内容であれ、彼らにとってはきちんとした理由があるはずなので、まずはその主張を否定せずに受け入れましょう。そのうえで、乳幼児専用スペースという場所の趣旨をふまえて、「なぜ小学生以上が入って遊んではいけないのか」をわかりやすく丁寧に伝えることを心掛けましょう。

一方では、「自分を見てほしい」「構ってほしい」とアピールするための行動ではないか、という見方もできます。威圧的な注意や叱責は、かえって彼らの行動を悪い方向へ助長させてしまうかもしれません。例えば「もぉ～！こんなところで何してるんだよ～！」といった調子で話しかけることで、彼らと対等な目線で接することが大切です。

また、その時に忘れがちになるのが、その場に居合わせた保護者や子どもに対してのフォローです。小学生が乱入してきた時は、不安や恐怖といった気持ちでいっぱいだったかもしれません。乳幼児親子が安心できる空間かと思いきや、小学生以上の子どもも入ってきて走り回られては、保護者にも緊張が走るでしょう。「大丈夫でしたか？」「ちょっと騒がしくなっていましたね」と少しばかり親子との会話をし、保護者の不安や緊張を取り除いてあげることが大切です。

21

仕事で忙しい時、子どもから
「一緒に遊ぼう」と言われてしまいます。



来館者の少ない時間帯に雑用などを入れるようにしているのですが、たまっていた事務仕事が終わらないうちに子どもたちが来館したり、子どもと遊んでいる時に大切な用事が入ったりすることも。これって、自分のタイムマネジメントに問題があるのでしょうか…。

(児童館職員)



いえもんのヒント

子どもからの遊びの誘いは大変嬉しいですが、その日に限って、締め切りが迫る書類作成があったり、どうしても外せない会議が入っていたりすると心苦しく感じるものです。子ども施設スタッフの本来の業務は子どもと遊ぶことではないのですが、子どもとの関わりが日常業務になる場では、どちらを選択するか葛藤する場面であると思います。

ここでは、あえて「その仕事は本当に今やるべきものなのか？」と考えてみると良いかもしれません。私自身の経験から、子どもと一緒に遊ぶ、おしゃべりする、一緒にごはんを食べるなど、子どもと同じ時間を共有することが、その子との関係づくりの第一歩だと考えています。今、目の前に抱える仕事の息抜きと考えて、5分10分だけでもその子どもとの時間にしてみませんか。ただ、その時についつい口に出してしまうのは、「ちょっと待って…」や「あとでね…」という言葉です。子どもにとっては「今」一緒に遊びたいという気持ちなのに、「ちょっと」という反応をされると、その時間は5分なのか5秒なのかわかりづらい話なのです。例えば、「あと5分だけ待っててもらえる？」と具体的な数字を出すなどして、反応の仕方を工夫してみましょう。

しかしながら、どうしても外せない会議などが入っている場合は、その会議を欠席してでも子どもとの時間をつくることは不可能に近いでしょう。その時は、「ごめん！今日はどうしても無理なんだ」と素直に謝りつつ、「次はいつ来る？その日に遊ぼうよ」と別の日に遊ぶ約束をするのも一案です。ただ、その日まで抱えている仕事を少なくしておく必要があるでしょうし、その日になって「やっぱり無理だった」は禁物です。子どもが相手とはいえども、“できない約束はしない”ことが大切です。

22 刃物を使わせることに不安があります。



使える道具が増えれば、クラフトのメニューも増え、遊びの幅も大きく広がると思いますが、子どもが大ケガをしている場面や、保護者が動揺しているシーンなどを想像すると、刃物を使わせることにためらってしまいます。注意喚起も、どこまで具体的にしたら良いのでしょうか。

(プレーパークスタッフ)

いえもののヒント



のこぎりや小刀を使った工作やものづくりは、他の遊びよりも子どもの豊かな感性や創造力を育みます。また、きり傷などの軽度のケガを通して、「ケガをしないように、次は〇〇してみよう」といった彼らの危険予知能力が高まるきっかけにもなります。しかし、刃物の取り扱いを一步間違えると大ケガにつながりかねないので、スタッフによる安全管理には一層の注意が必要です。

基本的に、刃物は「自分や相手を傷つけられる道具」であり、その注意喚起の方法は慣れている子も慣れていない子も同じです。実際どのように伝えるかはさまざまですが、その一例を紹介します。

まずは、扱う刃物の前に手や指を置かない、利き手ではない方の手に軍手をする、隣の人と少し距離をとる、といった必要最低限の情報を伝えましょう。

次に、そのうえで「では、使っている時に刃物の前に手や指を置いたらどうなるかな？」と子どもたちに聞いてみましょう。大抵の子どもたちは、指が切れる、血が出て大ケガになるといったパターンを想像すると思います。文字や言葉で道具の使い方や禁止事項を伝えるだけでなく、「なぜだめなのか？」「〇〇するとどうなるのか？」など自分で物事を考える時間を少しつくることで、受け身な注意喚起ではなくなってきます。また、同時に正しい道具の使い方を伝えることで、道具を大切に使う意識も育みたいですね。

とはいえ、子どもは大人が予想しない行動に出たり、注意喚起したのに同じことを繰り返したりすることもあります。常に大人が付き添い、その行動がケガや道具の破損につながらないか、刃物を扱うのに適切な環境であるかを見守ることが大切です。

刃物の取り扱いに対するリスクマネジメント（危機管理）は、スタッフの中で共通認識や一定の方向性を導き出しておくことが大切です。

【リスクマネジメントワーク】

ここで紹介するワークの方法は、複数人のスタッフで取り組むことを想定していますが、場合によっては一人でも取り組むことができます。あらかじめ、付せんや模造紙、マジック等を用意しておきましょう。

STEP1	子どもがどんな場面でどんな刃物を使うのか。 場面に応じて使用する刃物はさまざまあると思います。主題について、付せんを使って思いつく場面や刃物の種類を書き出してみましょう。その後、各自から出された付せんを場面ごとに分類・整理して全体で意見交換していきます。
STEP2	場面ごとに扱う刃物によって、どんなケガが起こるのか。 刃物を使用することにケガは付き物です。単に切り傷・すり傷ではなく、「〇〇の時に××のケガをした」というような具体的な例を、付せんに書き出してみましょう。その後、場面ごとに分類・整理して全体で意見交換していきます。
STEP3	起こりうる大きなケガを防ぐために、スタッフにできることは何か。 ケガによっては、救急車を要請するほどの重大な事故につながる例もあります。ここでは、STEP2で出た大きなケガをピックアップし、それを未然に防ぐために何をすべきかを付せんに書き出してみましょう。その後、スタッフごとに発表し、全体で意見交換していきます。

23

気軽にできない遊びをしたいという声に、
どう対応したら良いでしょう。



子どもたちから遊びの提案がありました。スタッフが足りないのと来館者が多かったことから、ちょっと無理だと断ってしまいました。その時の子どもたちの悲しそうな表情が、ずっと気にかかっています。

(プレーパークスタッフ)

いえもんのヒント



子どもたちにとって、鬼ごっこやおままごとなどの遊びは日常茶飯事でしょう。時には大きな道具を倉庫から出したり、広いスペースを占有したり、準備に時間がかかったりするなど、なかなか気軽にはできない遊びをやってみたいと提案されることがあると思います。しかし、その日のスタッフ体制が確保できていない、児童館やプレーパークなどは他の来館者が多い中で安全管理が難しいなどの理由で、子どもの「やってみたい！」という気持ちに伝えることが難しいケースがあるでしょう。

日常の子どもの「やってみたい！」という声にどう向き合うかは、大切なことですが容易ではありません。基本的な構え方としては、例え実現不可能なものであっても「それは無理じゃない？」と、大人のものさしで計らないことが大切です。実際に、自分自身の考えた遊びができるかできないかは本人が決めることであり、大人が決めることではありません。「実現不可能だな…」と思っても、まずはその子の声を聴き、一緒に考え、時には大人自身の意見も交わしながら、本人が意思決定するプロセスに寄り添いましょう。決して、大人から流れをつくらずに、本人の意思決定を「待つ」ことが大切です。

準備などに時間を要する場合、また時間をかけられる場合は、そんな構え方で子どもの声をじっくり聴くことができますが、「今からこんな遊びをしてみたいんだけど…」という子どもの声があがった時、どう対応しましょうか？

前述の問題を理由に「今日は無理！」と答えてしまうのは、いささかもったいない気がします。スタッフ体制、安全管理上の問題など、いわゆる大人の都合で子どもの自由な遊びが制限されてしまうのは、面白くありません。「今」というタイミングが難しい場合、私なら「今日は何時まで遊ぶの？」と尋ねます。その子が施設に滞在する時間の中で、折り合いをつけながら、どのような遊びならできるかを一緒に考えていきます。子どもたちの豊かな発想で遊びが発展していくために、私たち大人にできることは何かを考えるゆとりを持たらいいですね。

24 下ネタを連呼する子どもがいます。



子どもたちが下ネタを連呼して、おもしろがっていました。最初は聞こえないふりをしていましたが、大声なので他の来館者にも聞こえています。幼児を連れてたお母さんも困った顔をしてこちらを見えています。このような時はどうしたら良いのでしょうか。

(児童館職員)



いえもんのヒント

小学校高学年から中学生の男子にありがちな行動ですね。思春期を迎える彼らにとっては、自分自身の心と身体の変化を自ら感じていて、性への興味関心は日々増えています。エッチな言葉を辞書で調べて意味を知ったり、言葉を実際に発音したりすることで興奮することがしばしばあります。教育上よろしくないように感じて真っ向から否定してしまいそうになりますが、「彼らが大人に成長していくためのステップである」と一歩引いて考えて接してみましょう。その行動を否定してしまうと面白がって、かえって助長させてしまうこともあります。

とはいえ、下ネタを聞くことはあまり気分のいいものではありません。下ネタを聞いた自分が「聞いていて嫌だな」と感じたら、まずは自分自身のその気持ちを伝えてみましょう。英語の一人称であるI（私）からのメッセージを伝えるという意味で「アイ（私）メッセージ」ともいいますが、「私はそれを聞かされると不愉快な気分になるからやめてね」と理由をそえて相手に伝えてみましょう。ここで大事なのは、事の善悪を決めることではなく、その行動を見聞きした他者（私）にとって、快か不快かという観点で判断します。子どもたちは、こうした快・不快のメッセージを受け取りながら、どのように他者と接していけば良いのかを考えていきます。

また、同時に周囲の人たちへの配慮も必要です。仲間内でこそこそ話して面白がるのではなく、周囲の人たちに嫌でも聞こえるように大声で叫んでみたり、わざと異性や年下の子ども目の前で言ったりすることもあります。そうした時には、「まわりの人が聞いていて嫌な気分になるからやめてね」「異性の目の前でそんなことを言うなんて気分良くないな」といった形で、アイ（私）メッセージを伝えてみましょう。状況によっては、興奮が押さえられないこともあるので、あえて環境を変えることで気持ちを落ち着かせることも大事になってくるでしょう。

25

子ども同士のケンカにどう対応すれば
良いでしょうか。



子どもたちの間では、よくケンカが起こります。見て見ないふりをするわけには
いけないので、仲裁に入ることもしばしばありますが、どうしたらうまく解決さ
せることができるのでしょうか。

(プレーパークスタッフ)



いえもんのヒント

子ども同士で起きたケンカをどう仲裁して円満に解決するか、対応が難しく感じるところです。しかし、起きたケンカは誰の問題なのでしょう。間違いなく、大人ではなくその子どもたち本人の問題です。つまり、子ども同士で起きたケンカを、大人が一方向的に介入して円満に解決しようというのは、基本的にお節介な話なのです。

ケンカを認知した時

一口に“ケンカ”とはいえども、具体的には怒りの感情を込めた言葉を言い合うロゲンカ、腕力をぶつけあう暴力的なケンカの2種類があると思います。ケンカが起きた時の対応は、この2種類で大きく分かれるでしょう。

ロゲンカの場合、基本的には大人が介入する必要はないと思います。ケンカが起きていることの認知はしますが、遠くで様子を観察したり、わざと近くを通るふりをしながら「どうした？」と声をかけたりします。ただ、一方に対して威圧的になっている、誹謗中傷する言葉が飛び交うなどの時は、スタッフ自身の「アイ（私）メッセージ（P.50参照）」を伝えましょう。実際に介入しなくても、“気にしているよ”というメッセージを本人に発信することが大切です。

暴力的なケンカの場合は、それを認知した時点で、問答無用で介入する必要があると思います。

ケンカを仲裁する時

まずは、本人たちの主張やまわりで見ていた人たちの話から、実際の状況や経緯がどのようなものであったかを正確に理解します。次に、彼らの話を整理しつつ、話の落としどころを探っていきますが、ここで大切にしたいのは、大人が決めるのではなく子どもたちがどうしたいかを定めることです。「ごめんなさい」とお互いに謝って終わることは、確かに円満な解決方法ではありますが、それを押しつけてしまうことは大人のエゴイズムでもあります。子どもによっては、「謝ってもらわなくてもいい」と言って、ケンカ別れで終わるケースもあるでしょう。でも、お互いがそれで納得しているのならそれで大丈夫なのです。その日その場で解決しなければならないことは稀で、無理矢理にでも解決しなくてはいけないという固定観念は捨てた方が良いでしょう。

また、両者や一方の子どもの興奮状態が収まらず、“殴らないと気が済まない”という気持ちにまで高まっている時があります。そんな時、一方の子どもを、相手の子どもの姿が視界に入らない場所まで連れ出すことで、興奮状態が急速に収まる場合もあります。環境を変えることでお互いの気持ちをクールダウンさせ、そのうえで本人たちと話をしていけたら良いですね。

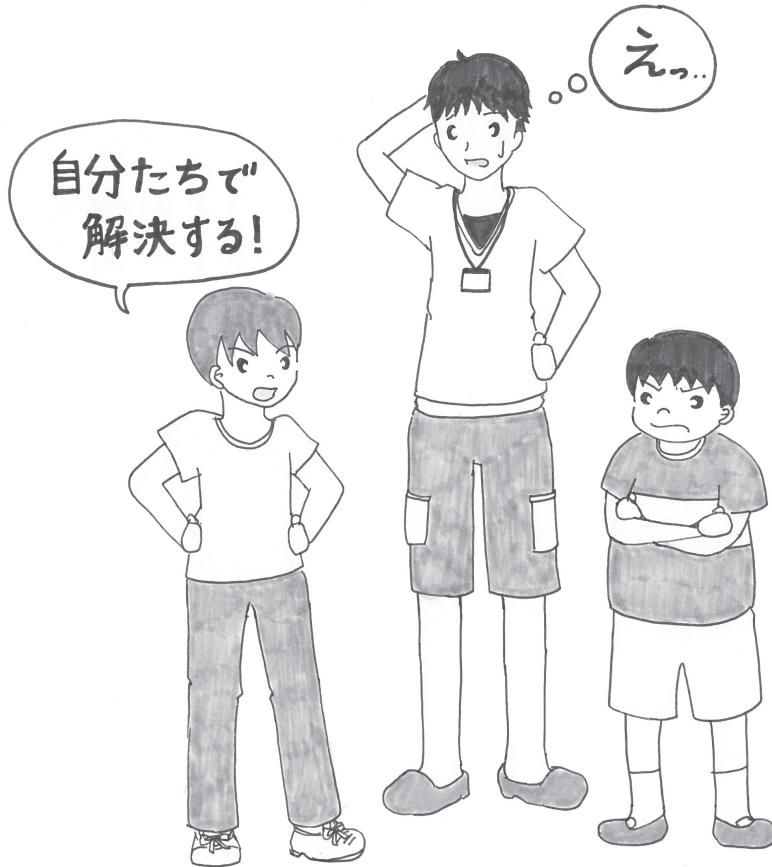
ケンカが収まったあと

ケンカが収まって一件落着、といたいところですが、この案件についてスタッフ全員でふりかえりをしてみましょう。仲裁していたスタッフやまわりにいたスタッフはどんな気持ちだったのか、あのタイミングで仲裁すべきだったか、もう少し見守る必要があったのかなど、今回の対応をもとに意見交換を深めましょう。

ケンカへの対応に答えはありませんし、仲裁するタイミングも関わり方もケースバイケースです。施設の方針や現場のスタッフの価値観によって、対応が変わることもあります。その都度、スタッフとのコミュニケーションを通して、子どもにとっての最善の利益のためにできることは何かを考えていきましょう。

26

子どもたちから、ケンカの解決を自分たちで
したいといわれました。



子ども同士のトラブルの仲裁にのりだそうとしたところ、「自分たちで話し合っ
て解決するから、向こうに行ってくれ」と言われました。どんなふうに見守ってい
たら良いのでしょうか。

(児童館職員)

いえもんのヒント



子ども同士で起きたケンカを、大人の力を借りずに自分たちで解決すると言い出すことは大変素晴らしいことだと思います。とはいえ、本当に自分たちの力で解決できるのかと不安に思うところもあるでしょう。彼らを信じて、「じゃあ、みんなで話し合ってね」と言ってその場を後にしたとして、しばらく経ってから様子を見てみると、さっきから状況が変わっていないというケースもあるでしょう。立ち会う大人はただ見て見ぬふりをするのではなく、“気にしているよ” “私はここにいるよ” というスタンスを子どもに示しつつ見守る、という立ち位置が必要な場合があります。

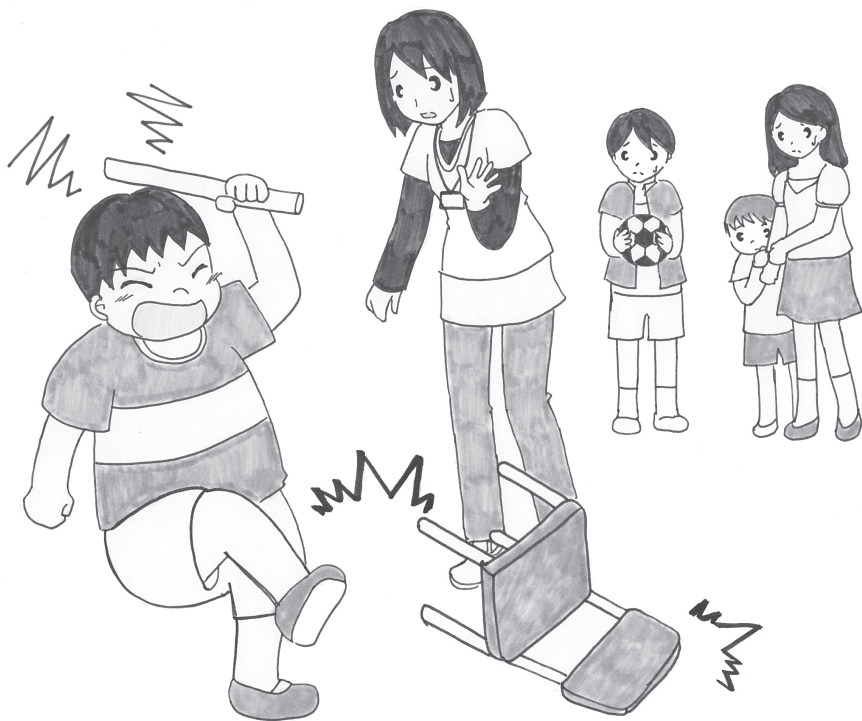
以前、私も子どもから「自分たちで話し合いたいから、スタッフはあっちに行っていて」と言われたことがありました。その後、遠くから逐一様子を観察していたのですが、子ども同士で何か話し合っている様子は伺い知れても、彼らの表情までは読み取れず、どのような雰囲気でも話し合っているのかもわかりません。そこへ別のスタッフが通りかかり、一方の子どもが辛そうな表情をしているのを見て、2人の話し合いに介入しました。そのスタッフがお互いの話を聞いてみると、一方の子どもから「ふざげんなよ」「謝れよ」と言われていて、もう一方の子どもは、それに対して何も言い返せずに心苦しい思いをしていたようです。

あとでふりかえてみると、「自分たちで話し合いたい」という子どもの思いを尊重するべく、その場の流れに任せていたところがあつたと反省しました。遠巻きで彼らの様子を観察していたばかりに、細かな子どもの表情まで読み取れず、「自分たちで話し合っているけど状況は変わらない」「誰か助けてほしい」という子どものSOSをキャッチできなかったのです。

仮に、子ども同士のケンカを子ども同士の話し合いで解決することに委ねたとしても、その場の流れも引き渡してしまわないようにしましょう。話し合いの場の進行は子どもたちに任せるとしても、いざとなった時にSOSをキャッチできたり、再び介入したりできるような見守りをしていくことが大切でしょう。彼らが話し合いをしている時も、お互いの子どもの気持ちに寄り添い続け、“気にしているよ” というメッセージを発信していきましょう。

27

自分の思いどおりにいかないと、人やモノに当たったり暴れたりします。



ちょっとしたことでもかんしゃくを起こして、大声を上げながら暴れる子どもがいます。ふだんは大人しいのに、いったん火がつくと手をつけられません。止めに入った職員のメガネが割れてしまったことも。

(プレーパークスタッフ)

いえもんのヒント



近年、子どもたちを取り巻く社会は急激に変化し、さまざまな場で**暴力行為※1**に発展するケースが増えてきています。平成28年度に行われた文部科学省の調査では、全国の小学校における暴力行為発生件数は約22,000件※2にのぼるという報告も出されました。学校だけでなく児童館や学童保育など放課後の児童生徒の遊び場においても、暴力的な言動は日常茶飯事だということが多くないのではないのでしょうか。

人やモノに当たったり暴れたりする子どもたちには、自分自身の感情のコントロールがうまくできないケースが多く見受けられます。実際にこうした行動に出してしまったあとで、「自分はこんなことするはずじゃなかったのに…」と気づきつつも、どう引き下がれば良いかわからず、行動がさらに発展してしまうこともあります。

そんな時には、その子が自分自身で感情のコントロールができるよう、手助けすることを念頭に置いて接してみましょう。時には、ある程度モノに当たらせて様子を見守ることも大切です。ただし、その空間からはさみや工具といった刃物など、子ども自身や周囲の人を傷つけるような道具を排除しなければなりません。自分の感情をコントロールできないぶん、モノに当たることでストレスを発散して気持ちを落ち着かせます。そして、その子の気持ちが落ち着いた頃を見計らって、ゆっくり話をしていきましょう。

ただ、他の来館者が大勢いる空間で“見守る”ことをしてしまうと、その場面を見て嫌な気分になる人もいたり、その子やスタッフに対する周囲の目つきが変わったりしてきます。こうした周囲への配慮もふまえて、あえて静かな環境に移動させるといったサポートも必要です。

また、その行動が他者への暴力行為に発展したり、人の存在や価値を否定するような発言をしたりした時は、はっきりとした態度でその言動を止めることが大切です。

※1 文部科学省における「暴力行為」とは、「自校の児童生徒が、故意に有形力（目に見える物理的な力）を加える行為」をいい、被暴力行為の対象によって、「対教師暴力」、「生徒間暴力」、「対人暴力」、学校の施設・設備等の「器物破損」の4つの形態に分ける、と定義している。

※2 出典：平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」結果（速報値）について（文部科学省、2017年10月26日報道発表）

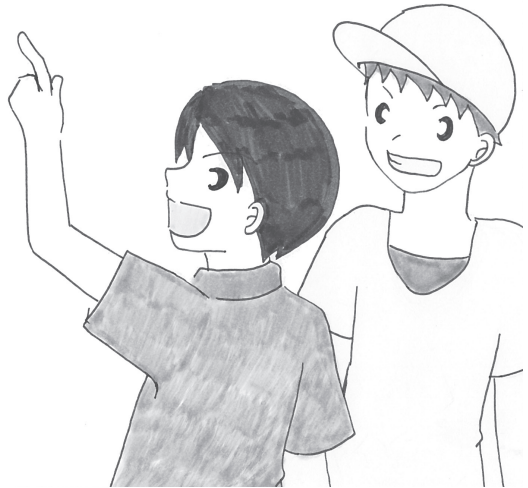
28

初対面の子どもから、「おまえ」「ババア」などと呼ばれました。

え...私?



おい、ババア!
おまえだよ、おまえ



いきなり乱暴な言葉で呼びかけられて、ムツとしたことがあります。どう反応していいかわからず、結果的に無視してしまったこともあります。こういうのって、どうかわけば良いのでしょうか。それとも、正面から受け止めるべきでしょうか。

(児童館職員)

イベント

キャンプ

子ども施設

スタッフ・ボランティア



いえもんのヒント

初めて会った子どもから正しい名前と呼ばれずに、「おまえ！」「ババア！」などの侮辱した呼称で呼ばれると、呼ばれた側としては腹立たしく、思わず強く怒鳴りたいところだと思います。しかし、こうした行動は、いわゆる「試し行動」と捉えて考えてみると良いかもしれません。本当は「話をしてみたい」「仲良くしたい」という気持ちがあるのに、わざと相手を侮辱するような言い方をして相手の出方を伺ってみたり、自分のことを構ってほしいというアピールの裏返しだったりします。言葉そのものを受け取るのではなく、「自分のことを無視しないで話しかけてくれた」と“変換”して考えてみましょう。

では、どのような反応が望ましいのでしょうか。これは、その時の子どもの心境や取り巻く状況によって変わってきますが、例えば、一般的な呼称で呼ばれた時と同じように「何？」と素直に反応するというパターンや、逆に「え？“おまえ”って私のことを言ってるの？」と相手に確認するように反応するパターンなどが考えられます。相手の言い方はどうであれ、「自分のことに興味や関心を持って話しかけてくれた」という事実を受け入れて、そこからお互いに自己紹介したり、何気ない会話につなげたりできると良いでしょう。

また、そのような呼び方をされた時に、周囲の人が不快に感じることもあります。「私は良いけど、他の人が嫌がる呼び方かもしれないから気をつけてね」といった「アイ（私）メッセージ（P.50参照）」を伝えて、対応しましょう。自分にとって好ましい名前でもらうためには、その子どもとの関係性が前提になってくると思います。強い口調で注意するのではなく、まずは目の前の子どもとの何気ない会話の時間を積み重ねて、関係性を築いていきましょう。

また、子どもには情緒的な“波”があります。大人も同じように、気分が良くて他人と社会的に過ごせる時もあれば、ストレスや疲れが溜まっていて他人に対して強い態度をとってしまう時もあるでしょう。関係性を築いていたとしても、こうした“波”によって相手の反応が変わることもあります。何かコツがあって短絡的にゴールへと導けるものではありませんので、心にゆとりを持って、中長期的なスパンでじっくりと関わってみましょう。

29

特定のスタッフをターゲットに、乱暴な言動をくり返す子どもがいます。



いつも特定のスタッフに突っかかってくる子どもがいて、困っています。できるだけ接触を避けようとするのですが、小さな施設なので限界があります。そのスタッフには、精神的な負担になっています。みんなでその負担を受け止めたいのですが…。

(プレーパークスタッフ)



いえもんのヒント

こうした状況は、もはやターゲットにされているスタッフ一人だけでは対応できないように思われます。スタッフが子どもに対して「やめなさい」と制止する関わり方ももちろんありますが、他のスタッフがターゲットにされているスタッフに対してどのように関わるかが、焦点になってくると思います。今回は、後者を論点にして考えてみましょう。

事態を認知した時

ターゲットにされているスタッフは、その場を何とか収拾しようと必死になりますね。その言動をやめるように制止したり、「アイ（私）メッセージ（P.50参照）」を伝えてみたりしてみましょう。また、その際に少し大きな声でやり取りをしたり、大げさな反応を示したりして、他のスタッフへのSOSを発信すると良いかもしれません。

そのスタッフと子どもが対峙している場面を認知した他のスタッフは、どう対応できるかを考えてみましょう。例えば、「どうしたの？」と声をかける、わざと第三者のスタッフが介入して子どもと話をしている間に、ターゲットにされていたスタッフを別の場所に移動させるなどが考えられます。対応例はさまざまですが、どんな状況であっても、ターゲットにされているスタッフを孤立させないことが大切です。

事態が収まったあと

その場面が過ぎたあとに、その場に関わったスタッフ全員でふりかえりをしましょう。事態の経緯ももちろんですが、ここではそれぞれのスタッフの思いを分かち合うことをねらいとします。事態が起きている中では目の前で起きていることに対応するのが精一杯で、なかなか本音や気持ちを他者に伝えることはできません。事態が収まった直後は興奮状態も冷めやらず、感情的になってしまいます。時間を置いて冷静になってから、「私はどんな気持ちだったのか」「あの時、自分は何ができたのか」を考え、その思いを共有することで、次に同じような場面に出くわした時にどう対応していくかを考えていきます。

また、特定のスタッフを苦しめない環境をつくるだけでなく、「その子どもがスタッフを相手に、なぜ乱暴な言動になるのか」という観点で、その言動の背景を考え合ってみましょう。そのためには、日頃からスタッフ同士が子どもの情報を共有しておくことも大切です。その背景に迫った時に、乱暴な言動に発展する前の、日常的な関わり方が見えてくるはずです。スタッフ全員で、子どもとスタッフを守っていく体制を考えていけたら良いですね。